懐かしさ感情の生起メカニズムの検討
―高齢者における positivity effect および想起される出来事の特定性と想起意図の有無からの総合アプローチ―

石井　あゆ美

懐かしさ感情は，誰もが日常場面で頻繁に経験している感情であり，健康な心理的状態を保つ上で重要な機能を持つことが報告されている。しかし，懐かしさ感情が生起するメカニズムはこれまでに明らかとされてこなかった。本論文では，その理由を，懐かしさ感情が認知と感情の複雑な相互作用の中で生じる感情であることに起因するものであると考え，認知の過程と感情の過程の両者の知見を統括した総合的アプローチをとることによって，懐かしさ感情の生起メカニズムを明らかにすることを目的とした。

懐かしさ感情の生起メカニズムに関する仮説モデルの構築に際し，本論文では想起手がかりから懐かしさ感情が生起するプロセス中に自伝的記憶の想起が介在することを仮定し，懐かしさ感情が生起するプロセスには，想起手がかりから自伝的記憶を想起する段階と，想起された自伝的記憶から懐かしさ感情が生起する段階の 2 つの段階が存在することを仮定した。更に，想起される出来事の特定性および想起意図の有無による調整効果を考慮した上で，各段階でみられるポジティブ優位性およびネガティブ優位性の欠如の効果を仮定した。本論文では以上の仮定を行うことにより，懐かしさ感情の生起の程度における年齢差を説明することが可能になると考え，その年齢差の説明を行うことによって，最終的に懐かしさ感情の生起メカニズムに関する仮説モデルを提案することが可能になると考えた。

研究 1 では，懐かしさ感情の生起メカニズムに関する仮説モデルのうち，想起手がかりと懐かしさ感情の生起の関連を取り上げ，その関連の中で働くポジティブ優位性およびネガティブ優位性の欠如の効果を検討した。高齢者を対象に，日常場面で偶発的に過去の出来事を思い出す手がかりとなったものと，その際の感情的反応に関する質問紙調査を行った結果，ネガティブな想起手がかりの中でも，特定性の高い，即ち特定的な出来事が想起されるものが想起の手がかりとなった際には「懐かしい」という感情が生じにくく，ネガティブな想起手がかりの中でも，特定性の低い，即ち概括的な出来事が想起されるものが想起の手がかりとなった際には「懐かしい」という感情が生じやすいことが示された。こうした結果から，高齢者では概括的な出来事が想起された場合にポジティブ優位性およびネガティブ優位性の欠如の効果がみられるため，その効果によって若年者に比べ懐かしさ感情が強く生じるという仮説を立てた。

研究 2 では，懐かしさ感情の生起メカニズムに関する仮説モデルのうち，想起された自伝的記憶から懐かしさ感情が生起する段階を取り上げ，その関連の中で働くネガティブ優位性の欠如の効果を検討した。研究 2 では高齢者と若年者を対象に，実験的に過去の出来事を想起させる調査を行い，想起された出来事の感情価と特定性を独立変数とし，生起した懐かしさ感情の程度を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。その結果，想起される出来事のポジティブ度が無条件に懐かしさ感情の生起につながることと，想起される出来事のネガティブ度と懐かしさ感情生起の程度の関連には，想起される出来事の特定性と想起意図の有無による調整効果がみられ，無意図的に想起を行う条件において概括的な出来事を想起した場合に限り，想起される出来事のネガティブ度が懐かしさ感情の生起につながることを示した。

研究 3 では，懐かしさ感情の生起メカニズムに関する仮説モデルのうち，想起手がかりから自伝的記憶を想起する段階を取り上げ，その関連の中で働くポジティブ優位性の効果を検討した。研究 2 で検討を行ったデータに関し，年齢群と想起された出来事の特定性および想起意図の有無を独立変数とし，想起された出来事の感情価を従属変数とした 3 要因の共分散分析を行った。その結果，年齢群と想起される

出来事のポジティブ度の関連に対し，想起される出来事の特定性と想起意図の有無による調整効果がみられ，高齢者が意図的に想起を行う条件において概括的な出来事を想起した場合に限り，想起される出来事のポジティブ度に対してポジティブ優位性がみられることを示した。

以上の結果から，本論文では懐かしさ感情の生起の程度における年齢差について次のように説明を行った。想起手がかりから懐かしさ感情が生起するプロセス中に自伝的記憶の想起が介在することを仮定すると，想起される自伝的記憶の感情価のうち，ポジティブ度に関しては，まず想起手がかりから自伝的記憶を想起する段階において，高齢者ではポジティブ優位性の効果によってポジティブ度が高まり，そして想起された自伝的記憶から懐かしさ感情が生起する段階において，想起される出来事のポジティブ度は無条件に懐かしさ感情の生起につながることから，ポジティブ優位性の効果によって想起される出来事のポジティブ度が高まった高齢者には，若年者に比べ懐かしさ感情がより強く生起すると考えた。また，想起される自伝的記憶の感情価のうち，ネガティブ度に関しては，想起手がかりから自伝的記憶を想起する段階において，たとえネガティブな出来事が想起されたとしても，想起された自伝的記憶から懐かしさ感情が生起する段階において，高齢者では無意図的に想起を行う条件において概括的な出来事を想起した場合には，ネガティブ優位性の欠如の効果によって，想起される出来事のネガティブ度が懐かしさ感情の生起につながり得るために，高齢者は若年者に比べ懐かしさ感情がより強く生起すると考えた。

そして懐かしさ感情の生起の程度における年齢差を上記のように説明することを通じて，本論文では懐かしさ感情の生起メカニズムに関する仮説モデルを構築した。本論文で提唱した懐かしさ感情の生起メカニズムに関する仮説モデルとは，想起手がかりから懐かしさ感情が生起するプロセス中に自伝的記憶の想起が介在することを仮定するものであり，想起手がかりから懐かしさ感情が生起するまでのプロセスに，想起手がかりから自伝的記憶を想起する段階と，想起された自伝的記憶から懐かしさ感情が生起する段階の 2 つの段階が存在することを仮定するものであった。更に，想起される自伝的記憶の感情価のうち，ポジティブ度に関しては，想起された自伝的記憶から懐かしさ感情が生起する段階において，ポジティブ度の高さが無条件に懐かしさ感情の生起の高さにつながるという関連があること（Figure 1; 矢印 b）から，想起手がかりから自伝的記憶を想起する段階においてみられるポジティブ度の高まりが懐かしさ感情の生起の程度を説明する（Figure 1; 矢印 a）という仮説モデルを構築した。また，想起される自伝的記憶の感情価のうち，ネガティブ度に関しては，想起手がかりから自伝的記憶を想起する段階において想起される出来事がネガティブなものであるかネガティブなものでないかは直接的には懐かしさ感情の生起の程度を説明せず（Figure 1; 矢印 d），想起された自伝的記憶から懐かしさ感情が生起する段階において，想起される出来事のネガティブ度が低下する条件が整っているかどうかが懐かしさ感情の生起の程度を説明する（Figure 1; 矢印 c）という仮説モデルを構築した。

こうして本論文では，認知の過程と感情の過程の両者の知見を統括した総合アプローチをとり，懐かしさ感情が強く生起する高齢者を対象として行った調査の結果を若年者における結果と比較することによって，これまで明らかとされてこなかった懐かしさ感情の生起メカニズムの仮説モデルを構築することを可能とした。また，本論文で検証した結果は，自伝的記憶想起に関するポジティブ優位性を検討する今後の研究に対して多くの理論的提言を持つものであり，更に，日常場面において心理的な健康状態を保つための方略や介入法を検討する際に有用となる応用的提言を持つものであった。（臨床死生学・老年行動学）

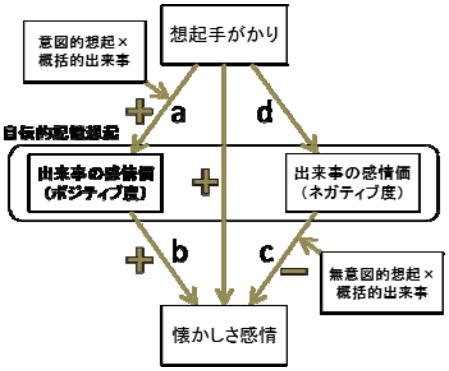

Figure 1
懐かしさ感情の生起メカニズム（仮説モデル）